

養護教諭50年の回想

平松 恵子

要旨

筆者が養護教諭に関係した仕事に従事して今年で50年経過した。この機会に自らの歩みを回想すると共に、後輩の方々に養護教諭の活動の今昔を知っていただき、何らかの参考にしていただければと思い纏めることとした。養護教諭1年目は、理想と現実のギャップにとまどったが、年数を重ねるにつれ、養護教諭の仕事のおもしろさや遣り甲斐を見出し、養護教諭の仕事について真剣に考え取り組むようになった。何故このように変わったかを考えてみると、子どもの存在だったと思う。子どもとの関わりの中で「私に出来ることは何か」を考え、やれることからしっかりとやろうと思い取り組んできた。時と人と運に恵まれ、いろいろな場で学んだことをそれぞれの学校で実践し、微力ながら子どもたちの心身の健康づくりに関与することができたことは幸せである。

キーワード：養護教諭、職務、実践、記録、回想

1. はじめに

筆者が養護教諭に関係した仕事に従事して今年で50年の節目を迎えた。半世紀経過というこの機会に、自らの歩みを回想し、後輩の方々に養護活動の今昔を知っていただくと共に、小さなひとかけらでも参考になればと思い纏めることとした。

養護教諭の職務は、学校教育法第37条12項に「児童の養護をつかさどる」と定められている。[養護をつかさどる]の意味は、昭和47年の保健体育審議会答申において、「養護教諭は、専門的な立場からすべての児童生徒の実態を的確に把握して、疾病や情緒障害、体力、栄養に関する問題等心身の健康に問題を持つ児童生徒の個別の指導にあたり、また、健康な児童生徒についても健康の増進に関する指導にあたるのみならず、一般の教員の行う日常的教育活動にも積極的に協力する役割を持つ。」とされた。更に平成9年の保健体育審議会答申において「児童生徒の心の健康問題の深刻化に伴い、児童生徒の身体的な不調の背景にいじめなどの心の健康問題が関わっていること等のサインにいち早く気付く立場にある養護教諭のヘルスカウンセリング（健康相談活動）が一層重要な役割を持ってきている。」と述べられて主要な役割が示された。

筆者も養護教諭として、置かれた時代その時々学校教育の方向、社会の状況、子ども達の健康課題を見据えて「養護をつかさどる」という職務を果たしてきた。

現在、学校教育においては、多くの職種が関わる時代になっている。そのような中で、養護教諭の仕事は基本的に他の職種との職務の違いが存在する。「養護」とは「子どもが心身ともに健康に成長し、自己実現することを助ける」、言い換えれば「生き生きと生きていく子どもを育てるための具体的活動」であり、その本質は「命を守ること（生命の保障）」「命を育てること（教育の保障）（人権の保障）」である。

勤務校等を軸にその時々養護教諭としての活動を回想した。1973（昭和48）年、国立岡山大学養護教諭養成所（3年課程）を卒業し、養護教諭としての一步を踏み出した。

2. 1973(昭和48)年4月 21歳～1980(昭和55)年3月 28歳 岡山県御津郡加茂川町立御北中学校勤務時代

1. 養護教諭としての活動

養護教諭として初めて勤務した学校である。まだすべての学校に養護教諭や事務職員が配置されていない時代であり、校長から「養護教諭を採用しようか、事務職員を採用しようか迷ったが、生徒達のために養護教諭を採用することにしたので、しっかり頑張ってもらいたい。」と励まされた。職員室に隣接した保健室から養護教諭としての活動がスタートした。保健室の中に職員のロッカーが併設されていて、先生方が自由に出入りされていた。岡山県教育公務員としての初任給は49,500円であった。

学生時代に「養護教諭の仕事はユニークな専門職としての仕事」と学んだが、赴任した学校は小規模校のために、養護教諭の仕事に加えて事務の仕事の一部と購買の仕事が校務分掌として割り当てられた。更に近隣の小学校へも週に2回兼務するということで、現実とのギャップの大きさにあたふたしていた。しかし、生徒と接することの楽しさはそれらのギャップをも忘れさせてくれるものであった。若いということと経験が有るということで、部活動の女子バレーボール部顧問をまかされた。その頃のバレーボールは、今のような6人制ではなく9人制であった。放課後は部員と共に、校舎の後ろにあるお宮の階段ダッシュをした後、運動場でパスやサーブ、アタック等の練習で共に泥まみれになって一緒に活動していた。町内、郡内の試合には引率し、試合の結果に一喜一憂する日々であった。養護教諭の新規採用研修もない時代であったため、仕事で分からないことがあると、同じ町内に赴任した同期の養護教諭や他の学校のベテラン養護教諭に電話で聞いたり、訪ねたりした。3年目には、郡の学校保健研修会が本校で開催されることになり、教頭先生、保健主事の先生とともに研修冊子を作製したり、校内の環境整備に追われた。研修会当日は特別支援学級で手作りの大型紙芝居を使って「性被害の防止」の保健指導を実施した。郡内の5つの中学校から管理職、保健主事、保健体育科教諭、養護教諭等が多数参加されていて、緊張しながら指導を行った。

日常の保健活動では、視力低下予防と午前中の近業からの毛

様体筋の緊張をほぐすために、昼休みの時間を利用してBGMを流しながら周囲の山々を遠方凝視する取り組みを行っていた。また保健だよりで目の疲れに効くツボ押しの紹介記事などを掲載した。他にも毎週末に上靴を持ち帰り、自分で洗ってくる取り組みも行っていた。栄養補給のために希望者へは肝油の販売も行っていた。更に汲み取り式トイレの清潔のための薬品散布など、今では想像もできないような保健活動も存在した。

同じ職場には若い教員が多く、長期の休日には車に同乗して福岡県柳川市の水路の川下りや京都府の天橋立へのドライブなどへ出かけた。仲間に恵まれ楽しく充実した7年間を過ごすことができた。

2. 法の改定等

- ・1975(昭和50)年 国立大学に4年制の養護教諭養成課程が設置された。

3. 1980(昭和55)年4月 28歳～1982(昭和57)年3月 30歳 岡山県御津郡建部町立福渡小学校勤務時代

1. 養護教諭としての活動

2校目の福渡小学校への転勤は、自ら希望した小学校勤務であった。7年間中学生と関わった中で、中学生の健康課題や悩みの多くは、中学生の前段階の小学生の時から習慣や関わりがとても大きいことを痛感させられることが多く、是非小学校勤務を経験したいと考えたからである。

中学校から小学校への転勤で驚いたことは、子ども達の甲高い声だった。最初の頃、休み時間などは校舎全体が子どもの声に共鳴して、鳴り響いているかのように感じられた。小学校での最初の取り組みは保健だよりの作成だった。1年生と6年生では発達段階に大きな差があるため、3～4年生の発達に焦点を合わせた記事内容や文字の使用を心がけた。漢字にルビをふることも忘れないようにした。「げんき」と命名した保健だよりには金太郎の絵を添えた。毎月、月始めの発行を心がけ、健康診断のこと、歯の健康、夏の健康づくり、運動会と健康、眼のお話など季節や保健行事に関する記事を書けるようにした。管理職の許可を貰った後、印刷室で印刷していると、年配の女性の用務員の方から「先生、試し刷りは裏も使って無駄を省くようにした方がいいですよ。」と指摘され、日頃の自分の姿勢を反省させられたこともあった。筆者が経験した小学校での健康相談活動は、中学校程にはニーズを感じる事が少なかった。6年生の思春期に入った女子児童からの恋愛相談の様な内容が記憶に残っている。(現在では、小学校の健康相談活動もニーズが高まってきている。)

研究活動については、誘ってくださる先生がいらっしゃって「岡山学校保健研究会」という自主勉強会へ参加し、岡山大学教育学部養護教諭養成課程の石原昌江教授の研究室に毎月集まった。岡山県内の小学校・中学校・高等学校の勉強熱心な養護教諭が集う勉強会であったので、参加するたびに大いに刺激をもらい、資料等も交換しあった。今の様にインターネットで様々な情報が手に入るという時代ではなかったため、勉強会で先輩方の養護活動の実際を知ることや資料交換をすること、新しい情報を知ることが出来て有り難かった。

忘れられないこととして、ある日のクラブ活動の時間終了後、卓球クラブで折り畳み式の卓球台を片付けていた4年生の男子が、力不足のために途中で折りたたんだ卓球台が落下し、左太ももをえぐる事故が起こったことがある。保健室に緊急連絡があり、救急カバンとタオルを持って体育館に駆け付けた時、男子は倒れて苦悶のうめき声を発していた。大きくえぐれた箇所からの出血はほとんど無く、脂肪の塊がのぞいていた。すぐ滅菌ガーゼとタオルで負傷した部位を覆い、バイタルサインを確認し、本人を励まししながら救急車を待った。入院加療となった事故だった。その後、安全面の管理、危機管理の見直しや器具の取り扱い、クラブ活動における指導について職員会議で再度確認し、二度と再び事故が起きないように教員間で指導の強化を図った。

2. 法の改定等

- ・1980(昭和55)年 第5次公立義務教育諸学校学級編制及び教職員定数改善計画

4. 1982(昭和57)年4月 30歳～1992(平成4)年3月 40歳 岡山市立香和中学校勤務時代

1. 養護教諭としての活動

1980年代前半(昭和56～60年)は全国的に中学校が荒れていた時代であったが、香和中学校も同様であった。郡部の小学校から岡山市内のしかも中学校への転勤を命ぜられ、緊張して赴任した。保健室は解放廊下の西角にあった。

新学期がスタートしてからもガラスは割る、廊下に自転車を乗り入れるというようなことが日常茶飯事であった。昼休み時間にはグループを組み、トイレで喫煙することが常態化していた。ある日、筆者は校内巡視中に3年生の男子トイレでグループの喫煙場面に出くわした。勇気を振り絞って喫煙を注意すると、火のついた煙草を後ろ手に隠し「どこに証拠があるんなら。」とグループ内のボスにすざまじく「背中から煙が上がっているのが証拠」と言い返したが、言葉も手足も震えていたことを今でもよく覚えている。殴られるかと思ったが、暴力を振るうことはなく、口を荒らしながらもトイレを出ていった。

授業妨害、対教師暴力、喧嘩等が頻繁に起こり、校内暴力という言葉が使われるようになった時代でもある。新期採用の音楽教師の時間にはピアノの上に上がって暴れるようなこともあって、折角新期採用された音楽教師が早々に退職するという事態になった。更に、英語教師が潰瘍性大腸炎になって休職した。

その当時は、ツベルクリン反応検査が学校の健康診断項目として規定されていた。保健室では、健康診断用のガラスのツベルクリン注射筒を煮沸消毒して保管していたが、昼休みに複数の3年生男子が来室し、その中の一人の対応している間に他の一人が注射筒を勝手に持ち去り、中庭で水鉄砲代わりに使って遊ばれたという失敗もあった。保健室はエスケープの場所というイメージが強く、授業中も授業を受けたくない怠学傾向の生徒が保健室にしょっちゅう出入りしていた。そのような日常で、生徒指導主事は、いきなり保健室に入って来て、「保健室は病人が来る場所だ。それ以外の者はすぐ出ていけ。」と大声で生徒を叱責し、外に追い出すことが多かった。また「保健室を閉鎖し

て職員室に居て欲しい」と言われたこともあった。保健室を閉鎖することは全く考えなかったが、今のような状態では本当に必要な生徒が保健室を使いにくいのは確かであるので、再度保健室利用のルールを入口ドアに大きく書いて掲示すると共に職員会議に提案した。提案内容は、保健室は閉鎖しない、授業中は教科担任の許可を得、職員室を経由しサインをもらって来室するであった。すぐには改善しなかったが、大荒れの3年生が卒業し、新たに1年生を迎えて、根気よく使用ルールを説明し、生徒への対応を続けたところ、ルール無視の生徒が少しずつ減ってきた。荒れた学校から普通の学校にもどすために、教職員みんなで努力し、徐々に落ち着いてきた。荒れた学校であったからこそ、教職員の結束力は強く、校長を中心に一枚岩で頑張ったためか、今でもその当時の教職員の集まりが続いている。

校舎が増築され、廊下の突き当りの小さくて古ぼけた保健室は、新たに増築された校舎の1階で、普通教室並みの広さが確保され、明るく清潔な保健室となった、備品も増えた。新しくなったからの出来事で印象に残っていることは、3年生女子Kさんのことである。Kさんは友人との関係、家族、なかでも母親との葛藤から摂食障害（思春期やせ症）を発症した。それまで保健室に来室することはほとんどなかったが、徐々に保健室頻回来室となり、保健室登校に至った。保健室での対応は、Kさんの受け入れ、居場所としての保健室を目指した。Kさんは感情の起伏も激しく、養護教諭との些細な行き違いから立腹して保健室を飛び出し、上靴のまま自宅に走り返ったこともある。自宅は豪壮な構えであり、父親は会社を営んでいて経済的には何不自由のない家庭であった。ある日担任と一緒に家庭訪問した時、Kさんはケーキを焼き、自分は食わず、母親や訪問した担任、筆者に食べることを強要してきたこともあった。父親は仕事で忙しく、子どもの教育は専業主婦の母親にまかされていて、完璧主義者の母親とKさんの関係はギクシャクし、様々なプレッシャーに堪えられなくなったようだった。担任、教科担任からのプリント学習による学習支援も受けながら保健室登校を継続していたが、結果は不登校になったケースであった。今考えるともっと出来ることはなかったのだろうかと思やまれるケースである。

<書籍>

- ・1988（昭和63）年 書籍 教師・子ども用生活についての保健指導ノートブック（共著）
- ・1990（平成2）年 書籍 フローチャートを使った救急処置と保健指導 外科編（共著）

2. 法の改定等

- ・1988（昭和63）年 教育職員免許法の一部改正 専修免許状の新設1種・2種への免許状名称変更
文部省：学校保健課と学校給食課が統合され学校健康教育課として発足
- ・1988（平成元）年 新規採用養護教諭研修開始

5. 1992（平成4）年4月 40歳～1994（平成6）年3月 42歳 岡山市立興除中学校勤務時代

1. 養護教諭としての活動

岡山市北部の香和中学校から南部の興除中学校へ転勤した。同じ校種の中学校への転勤であったが、雰囲気はずいぶん異なっていた。校舎も新しく掃除も行き届いていた。生徒たちも前任校に比較すると随分落ち着いていた。保健室も日当たりがよく、生徒がやって来て「ほっとする」と言いながらソファに腰を下ろすことも多かった。保健主事は女性の若い体育の教員であった。沢山のプランターにはパンジーが咲き乱れていて周囲の芝生の緑と美しいコントラストを描いていた。まもなく女性の用務員さんの手入れによることが判明した。間もなくして用務員さんと仲良くなり、生徒や教員のいろいろな情報も教えて頂くようになった。この中学校は、小学校と隣り合わせに立地していて、給食室が小・中合同であった。毎日、給食時には小学校の先生方と給食室前で出会うことになり、自然と小学校の養護教諭と一緒に保健指導の内容を交換したり、校内放送の原稿を作成して放送したりと一緒に保健教育を行うことが多くなった。小学校の養護教諭も保健指導に熱心で、一緒になってあれこれ考えるのが楽しみであった。

養護教諭の実践において大切なことは二つあると考える。一つには、子どもの視線で考え、企画し、実践するとともに、子どもがどのように変容したかを評価することである。二つには、「つなげる・深める・広げる」ことである。養護教諭は、日常の執務の中で保健管理から健康教育に、個から集団に、保健室から学校全体に、保健室から学校医に、関係機関に等々つなげている。また、健康教育においては実態から指導に、学級活動、行事、日常指導等の指導の場をつなげて指導している。具体的指導では、短時間でさらっと指導したり、時間をかけて「深める」指導をしたりしている。指導後、保健便りやお知らせ等で家庭に啓発しして「広げる」を実践している。また「つなげる・深める・広げる」実践は、子ども達の健康行動の変容につながり、自己の健康管理ができる子どもへの一歩となる。このことは、学校の健康教育の目的である生涯を踏まえた健康づくりの基礎基本の育成に貢献できるものであると考える。

次に保健委員会活動についてであるが、保健委員会を活性化するためには、生徒に活動の仕方をしっかり指導することが大切である。最初は指導に時間がかかるが、徐々に生徒の手により活動させるようにする。1年間続けると下級生は先輩の姿から学び、どのように活動すればよいか理解するようになる。そして、生徒はいつの間にか、「保健委員会はこの活動をしている」とイメージが作られ、意欲のある生徒が保健委員を希望するようになる。ここまで来ると生徒がどんどん活動を展開する。生徒たちは、「自分たちで企画し、活動できた」という成就感や達成感を味わうことができる。活性化する手立ては、組織作り、活動時間の確保である。保健委員会の活動の活性化は、学校の健康づくりの取り組みの活性化にもつながり、成果が出てくる。生徒たちのアイディアは素晴らしく、驚かされることもあった。保健委員会の取り組みは、健康に関する学校生活の充実や改善向上を図る活動にとどまらず、生涯の健康づくりに発展させる

ことが出来る活動である。

ユニークで個性的な先生方と元気な中学生に囲まれ、楽しく勤務していた2年目の2月、校長室に呼ばれ、岡山県教育委員会の指導主事という話が来ていることを知らされた。「私に務まるでしょうか?」と不安にかられて尋ねると、「教育委員会の勤務はとても大変とは聞いているが、命まで取られるようなことはないと思うから頑張ってみなさい。」と言って背中を押してくださった。家族とも相談したが、義父は、「県庁職員は5時には帰っているから仕事が楽になるのでは。」と楽観的に言って賛成してくれた。夫・義父母の協力もあってお話を受けることにした。後で分かったことであったが、5時に帰ることが出来るのは、アルバイトの職員であり、正規の職員は遅くまで働いていた。

2. 法の改定等

- ・1993(平成5)年 第6次公立義務教育諸学校教職員定数配置改善計画
- ・養護教諭の複数配置

6. 1994(平成6)年4月 42歳~1999(平成11)年3月 47歳 岡山県教育庁保健体育課勤務時代

1. 学校保健・養護教諭担当指導主事としての活動

岡山県の学校保健・養護教諭担当指導主事として県庁勤務となった。前任者からの引継ぎは有ったが、学校での教育職しか経験がなく、行政職としての仕事内容が把握できていなくて、最初は戸惑いながら上司や同僚指導主事の助けを借り、懸命に日々の仕事に取り組んだ。メール処理、文書作成、提案資料作成、養護教諭部会、ブロック研究会等での指導助言、全国大会等での指導助言、予算書作成、県議会での答弁書作成等これまでの仕事の内容とは異なった内容ばかりで何もするにも時間がかかった。指導主事としての平常時の仕事をこなしながら、文部省主催の全国指導主事研修会への参加は必須であった。この研修会は、東京宿泊1週間の長期出張であった。文部省の新しい施策を岡山県の養護教諭へ正確に伝えるメッセンジャーの役割の他にも、各都道府県の指導主事と情報交換を行うことのできる貴重な時間でもあった。東京出張中も岡山県養護教諭担当指導主事の仕事を替わって行ってくれる人はいないため、1週間県庁を留守にしている間に、筆者の机の上は書類の山になっていた。月曜日に平常の仕事ができる状態にするためには、土、日に出勤して仕事を片付ける必要があった。当時7歳だった長男を連れて行って溜まった仕事を処理している間、長男は床にミニカーを走らせながら遊んで待っていてくれた。私と同じように休日出勤してきた指導主事に声をかけてもらうこともあった。

平成8年7月25日~26日の予定で、岡山県において全国養護教諭研究大会を開催することとなった。筆者は、担当指導主事として、岡山県養護教諭部会の尾上琴恵部会長、藤原知子副部会長達と何度も何度も打ち合わせを重ねながら、同時に文部省の三木とみ子教科調査官とも連絡調整しながら開催準備を進めていった。研究主題を「心や体の健康作りを通して、学ぶ楽しさと成長する喜びを一学校教育の課題解決に機能する健康教育の推進と養護教諭の役割」と定め、二日間にわたって文部省

講演、記念講演、シンポジウム、部会別研究協議会を開催した。岡山県を始め、全国から1,574名の養護教諭や教育委員会からの参加者を得て成功裏に終了することができた。その年は腸管出血性大腸菌O157の大流行により、大阪府堺市で発生した学校給食による食中毒では患者数9,000人を超え、児童3人が死亡し社会的に大きな影響を与えていた時期であった。研究大会の昼食は、岡山名物の「祭り寿司」を準備したが、暑い盛りの時の食事提供であるが、決して食中毒を起こしてはならないという固い決意の下、弁当提供者の三好野弁当さんとも打ち合わせを重ねて、当日は提供直前まで温度管理を徹底した。おかげで参加した皆様に岡山の味を堪能していただくことができた。夜の懇親会は東急ホテルで行ったが、尾上養護部会長を中心に岡山らしさ満載の懇親会となり、文部省から参加して下さった三木とみ子教科調査官にも大いに楽しんでいただいた。

全国養護教諭研究大会を終え、一息つく間もなく、翌年秋には岡山県が中国学校保健研究大会の当番県で、引き続き大会準備に追われ遅くまで残業することとなった。7月末の土曜日は岡山花火大会で、花火が始まった頃やっと帰宅してみると、長男が母と花火に行くことを楽しみに待ち構えていて地団太踏みながら「早く!早く!」と私の手を引っ張りながら駆け出して行ったこともあった。母の帰りをずっと待っていた長男には今でも悪いことをしたなと心苦しい気持ちになる。

その他にも、岡山県養護教諭新規採用研修の計画・立案、養護教諭採用試験問題の作成、面接試験官の仕事もあった。

<書籍>

- ・1994(平成6)年 保健・安全管理の手引(共著)
- ・1998(平成10)年 養護教諭—毎日の執務とその工夫—(共著)

2. 法の改定等

- ・1995(平成7)年 学校教育法施行規則の一部改正、保健主事に養護教諭も充てることが可能となった。
- ・1997(平成9)年 保健体育審議会答申により、養護教諭の行うヘルスカウンセリング(健康相談活動)が一層重要な役割を持っているとされ、広く周知されるようになった。
- ・1998(平成10)年 教育職員免許法の一部改正により、養護教諭の免許状を有し、3年以上の勤務経験がある者で、現に養護教諭として勤務している者は、保健の教科の領域に係る事項の教授を担任する教諭または講師となることができるようになった。

養護教諭の養成カリキュラムの改善が行われ、養護に関する科目「健康相談活動の理論及び方法」「養護概説」が新設された。

7. 1999(平成11)年4月 47歳 ~2002(平成14)年3月 49歳 岡山市立福南中学校勤務時代

1. 養護教諭としての活動

教諭が指導主事を終えて教育現場に戻る際は、管理職として戻るのが通常であったが、養護教諭には管理職の道は閉ざされていたため、再び養護教諭として現場に戻った。(2000(平成12)年、養護教諭の管理職への登用が法的に可能となった。)

この中学校も荒れていた。朝から保健室には授業に行きたくない生徒が溢れ、保健室内の物品を許可なく触ったり、見たり、

ベッドに勝手に寝たり、ベッドの下に隠れたり、時には備品を壊したりと気を許す時もなく、毎日の勤務に苦勞させられた。一計を案じて、入り口、書類戸棚、器械戸棚の鍵を全て紐に通してそれを首からネックレス代わりにぶら下げて、勤務中はそれを外すことなしに過ごした。喧嘩も日常茶飯事で、ある時教室の後ろで中2の男子が殴り合いの喧嘩をした。Y君のパンチが後部ドアの大きなガラスを突き破った。驚いたY君はその腕を思い切り引き抜いたため大怪我を負った。出血した手を下げたまま、廊下に血液をだらだら流しながら保健室に入室した。顔色が蒼白であったためすぐソファに座らせ、止血処置、バイタルサイン確認後ただちに救急車を要請した。近くの労災病院へ移送し、緊急手術を行ってそのまま入院した。医師から深部、中層部、表層部と3層に渡って慎重に縫合を繰り返したとの説明を受けた。傷跡は残ったが、幸い後遺症は残らなかったのが幸いだった。生徒指導主事、保健主事とともに、休憩時間の過ごし方、出血した場合の止血方法、保健室移動の際の出血部位の挙上位置等について緊急職員会議に提案し、担任から指導の徹底を図った。

健康観察について、健康観察は「心身ともに健康な状態であるか、一定の方針に基づいて詳しく見極める」ことである。具体的には、視診と本人からの聞き取りにより、健康状態を把握する。毎朝始業前、担任が健康観察簿により実施し、その後、廊下の所定の位置に健康観察簿を掛ける。授業開始後養護教諭は、校内巡視を兼ねてすべての教室を回って回収するようにした。保健室で集計した後、職員室の掲示板へ集計結果を掲示した。月末には一か月の集計を行い、結果は保健だよりや生徒指導等に活用した。インフルエンザ等の流行時には、健康観察の方法を詳しいやり方に変更し、詳しい実態の把握に努めると共に、出席停止、学級閉鎖措置等必要な対策の根拠とした。健康観察は、教育活動を支える基盤であるが、荒れた中学校ということもあって、生徒指導に日々追われる中で、理想通りにはいかなかったのは残念であった。

生徒達も気持ちの荒んでいる者が多く、廊下のポスター等破られることは日常茶飯事であったが、生徒の心に潤いを持たせる一方策としてトイレの手洗い場に「生花を一輪飾る」ことを日課にしたところ、不思議と誰も生花をちぎったり抜いたりしなかった。気持ちの荒んだ生徒にも美しい生きた花は心に潤いを与えるようだった。女性の用務員さんもお花が好きな方だったので、二人で協力して生花を絶やさないように心掛けた。

健康相談について、健康相談で生徒から受けた相談内容では人間関係に関すること、生活習慣に関すること、部活動に関すること、不定愁訴、性に関すること、過換気症候群に関すること、アレルギーを含む身体の健康に関することの相談が多かった。教員から受けた相談では、生徒の心身の健康に関すること、登校しぶりに関すること、教員自身のこと、職場、家族等に関して相談を受けることが多かった。自閉症スペクトラム症、ADHDの症状を呈する生徒との関りもあった。この頃は発達障害者支援法公布前であったが、教育現場で問題になっていた時期であった。

福南中学校勤務2年目に、相談活動のスキルアップを目指して夜間の岡山大学大学院教育学研究科学校教育臨床専攻に入学

した。中学校での勤務を終えてからの夜間の学びは肉体的にはきつかったが、同期の仲間も皆仕事をしながら通学していたので、心強く励ましあって2年間頑張ることができた。修士の資格取得後は臨床心理士資格試験に向けて同期の者と共に過去問に取り組み、何とか資格取得できた時は本当にほっとした。資格取得後は、教師の立場、カウンセラーの立場を理解した上で、養護教諭の職務に従事することができるようになった。この頃、紹介してくださる方がいて倉敷市立短期大学の前橋 明教授の研究室に何うようになり、少しずつ研究についての指導を受けるようになった。前橋先生つながりでノートルダム清心女子大学の中永征太郎教授にもご縁を頂くようになり、学会へも足を運ぶようになった。学会発表の前には先生方から懇切丁寧に指導していただいた。学会発表はいつも大変緊張していたが充実もしていた。

<出来事>

- ・岡山県教員永年勤続表彰受賞
- ・2000(平成12)年 岡山大学大学院教育学研究科学校教育臨床専攻入学
- ・2002(平成14)年 修了 修士(教育学)取得
修士論文「中学生の無気力感に関する臨床心理学的研究」
養護教諭専修免許状、中学校教諭専修免許状(保健)取得

2. 法の改定等

- ・2000(平成12)年 学校教育法施行規則の一部改正により養護教諭の管理職への登用が可能となった。
- ・2001(平成13)年 第7次義務教育諸学校教員配置改善計画により、小学校は児童851人以上、中・高等学校は801人以上、養護学校61人以上に複数配置が進められることになった。

8. 2002(平成14)年4月 49歳～2012(平成24)年3月 60歳 岡山県立岡山芳泉高等学校勤務時代

1. 養護教諭としての活動

生徒数1,080人の大規模校で養護教諭は複数配置だった。勤務した10年間に6人の若い養護教諭、養護助教諭の方と複数配置で仕事をした。筆者も複数配置での勤務は初めてだった。6人とも大学卒業したての若い方たちで、毎朝保健室の行事黒板で本日の行事の確認から養護活動を開始した。これからの岡山県の将来を担う若い養護教諭、養護助教諭を育てるという気持ちで6人に接した。複数配置の効果については、①常時在室できるため、緊急時に迅速に対応できる。②生徒の入室時に丁寧な対応ができる。③救急処置において、多面的な判断と処置ができる。④健康診断の準備・実施・事後指導が余裕を持って行える。(芳泉高校は、1,080人の生徒の健康診断を1日で実施していたため、万全の準備が求められた。)⑤心身に配慮を必要とする生徒の支援が十分に行える等である。複数配置の良さは、養護の専門家が2人いることで、1+1=2の力以上に力を発揮できることである。そこで、2人で話し合って、全学年で30学級ある各学級で、保健委員を司会進行役にして「保健ロングホームルーム」を計画し実施した。それ以外にも生徒が自分で選べる「健康講座」や、「保健講話」を実施し、それぞれの保健行事からの学びを保健室から生徒への進路指導とした。これらは毎年の行事となり、

内容を考えたり、講師の選定等で知恵をしぼった。

学校保健委員会については、学校における健康問題を研究協議し、健康づくりを推進する組織である。また、学校と家庭、地域社会を結ぶ健康に関する組織でもある。特に、健康課題は家庭や地域社会と密接に関連していることから、この学校保健委員会を有効に機能させることが、学校・家庭・地域が連携した学校保健活動の推進にとって重要である。芳泉高校では7月と2月の年2回学校保健委員会を実施していた。学校保健委員会では、生徒の健康課題への協議にポイントを置いて実施した。特に同じ校区の中学校との連携は、健康課題解決上重要と考えて、中学校の保健委員の代表と保健主事、養護教諭、栄養教諭に高校の学校保健委員会へ参加し、発表してもらう形を取り実施していた。

養護教諭部会との関わりについては、岡山県養護教諭部会部会長を2期4年間務めた。部会長という役職上学校外に出張することも多かったが、会合等で外に出ても養護教諭複数配置校であるため、常に一人は保健室に居ることにより、保健室を閉めることなく、安心して会議に臨むことができた。心から有り難いと思った。4年間の部会長任期中、複数配置の相方をはじめ、いろいろフォローしてくださった役員、協力バックアップしてくださった会員の方々に感謝、感謝である。

2003(平成15)年「芳泉すこやかな子どもを育てる会」を立ち上げ、10年間活動した。10年間の取り組みを記す。本会は筆者が芳泉高校の日笠校長、隣の芳泉中学校の山根校長、野々上養護教諭、地域の近藤町内会長さん、開かれた学校づくりの代表の山下さん等に働きかけて立ち上げた会で、芳泉地域の子どもの健康づくりに取り組む組織である。芳泉地域は、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校が隣接しているという地理的条件に恵まれ、地域内に公民館、保健センター、警察署等の施設も在り、連携を作りやすい環境にあった。子ども達の健康問題の改善には、一つの学校だけでの取り組みでは成果が上がりにくい、校種間で連携し、更に家庭や地域と連携して一体になって取り組むことにより、健康問題の改善が図られるのではないかという思いから会を立ち上げ、活動を開始した。保育園から高等学校、更に地域関係者まで含めた組織は、全国的にも珍しいものであった。本組織を核にして、心と体と生活の面から子ども達の健康づくりに取り組むとともに、子ども達が主体的に自らの健康づくりができるようになることを目的とした。

- ・2005(平成17)年「日常の生活と健康に関する調査」結果報告書作成
- ・2006(平成18)年 性教育「芳泉地域版」作成と活用
- ・2006(平成18)年～2008(平成20)年 財団法人福武教育文化振興財団助成「个性的教育推進地区・校」を受け、財団から3年間で900万円の助成を受けることとなった。活動については、子ども達の健康指標として骨密度を採用し、健康づくりを行うことを決定した。早速、骨密度計を購入し、保育園児から高校生まで、当時4,000人近くの人数であったが、全ての子どもの骨密度を測定し、結果を集計分析した。その結果、小学校、中学校、高等学校の児童生徒に骨密度低群の者が存在していることが明らかとなった。次に「生活習慣調査」

を実施し、骨密度低下の原因を探ると共に、骨密度の上昇に向けて活動することとした。具体的活動は、各校での保健指導と出前保健指導、夏休み中の食事指導教室の開催、骨コツ体操を考案し、芳泉地域の学校・園で子ども達へ普及啓発した。運動会等を活用して保護者、地域住民へも普及を図った。各校の養護教諭、栄養教諭・栄養士と共に地域の愛育委員の方々が普及啓発の原動力となった。考案したオリジナルの「骨コツ体操」はユーチューブ再生回数1000回を突破した。次年度も同様の取り組みを行うと共に、調査結果や成果と課題について、日本幼少児健康教育学会、日本学校保健学会等で発表した。財団法人福武教育文化振興財団助成「个性的教育推進地区・校」指定後3年目に3年間の成果と課題をまとめ、研究発表会を開催した。事前に県内全ての教育委員会を通じて各学校に案内文を配布したことにより「地域で取り組む健康づくり」研究発表会の当日参加者は1,000人超の盛況であった。

- ・2009(平成21)年 社団法人日本酪農乳牛協会助成「岡山県酪農乳牛協会モデル事業」を受けて活動
- ・2010(平成22)年 「地域で取り組む健康づくり実践報告書」作成「芳泉すこやかな子どもを育てる会」の活動を他校園や地域へ公開し、子ども達の健康問題を考える機会とした。児童生徒への健康教育としては、ロングホームルーム活動、生徒会活動、保健委員会、部活動(クッキングクラブ)等を活用して、健康教育に当たった。その結果、芳泉高校は、平成22年度の岡山県学校保健推進学校表彰を受賞した。更に岡山市推進事業助成「地域活動部門」を受けて活動した。「芳泉すこやかな子どもを育てる会」は「すこやかな子どもを育てる会」と名称を変更して、現在も地域の愛育委員さんを中心に活動が継続されている。
- ・2011年(平成23)年 5月 日本学校保健会の「21世紀・新しい時代の健康教育推進学校高等学校の部」応募
- ・2011年(平成23)年 12月 日本学校保健会より芳泉高校へ学校訪問がなされた。
- ・2012年(平成24)年 3月 芳泉高校が日本学校保健会主催の「21世紀・新しい時代の健康教育推進学校表彰高等学校の部 最優秀校」に選出された。東京医師会館で表彰式が催され校長、生徒保健委員長、養護教諭が表彰式に臨んだ。

<研究論文等>

- ・2003(平成15)年 対人関係がうまくいかない30代女性との面接(論文)
- ・2004(平成16)年～2008(H20)年 岡山県養護教諭部会会長(4年間)
- ・2005(平成17)年 学校保健と地域保健の連携(Ⅲ)－中学生の性に関する実態からの検討－(論文)
- ・2006(平成18)年 中学生の健康状況と情報機器の使用及び生活時間との関連について(論文)
- ・2006(平成18)年 地域活動を活かした子どもの健康づくり(論文)
- ・2007(平成19)年 高校生における自覚症状の訴え数と肥満度に関連するライフスタイル要因の検討
- ・2007(平成19)年 高校生の食物摂取の申告の妥当性と不定愁訴との関連(論文)
- ・2008(平成20)年 中学生の生活習慣に関連する健康意識・

知識・態度についての中日比較～蘇州市と岡山市の生徒を対象として～（論文）

- ・2008（平成20）年 中学生・高校生の不定愁訴の発現と生活習慣〔Ⅰ〕睡眠時間との関り
- ・2008（平成20）年 中学生・高校生の不定愁訴の発現と生活習慣〔Ⅱ〕朝食摂取頻度との関り
- ・2009（平成21）年 養護教諭のコーディネート力
- ・2010（平成22）年 危機管理意識を高める研修に関する研究
一個人が、組織が、どう動くか。みんなが危機管理意識を高め、
危機対応能力を身に付けるためのブックレットの作成と活用
をめざしてー「いざ」というとき、あなたは（共著）
- ・2010（平成22）年 中学生・高校生の不定愁訴の発現と排便頻度との関り
- ・2011（平成23）年 高校生の生活習慣と自覚症及び抑うつ傾向との関連（論文）
- ・2012（平成24）年 高校生の生活満足度とライフスタイル及び健康状況との関連について（論文）

<表彰>

- ・2007（平成19）年 岡山県立岡山芳泉高等学校功労者表彰受賞
- ・2008（平成20）年 岡山県学校保健会会長表彰受賞
- ・2009（平成21）年 日本医師会会長表彰受賞
- ・2010（平成22）年 文部科学大臣表彰受賞

<出来事>

- ・2005（平成17）年 ノートルダム清心女子大学大学院人間生活学研究科人間複合科学専攻 入学（途中、義父母介護のため2年間休学）
- ・2006（平成18）年 日本臨床心理士資格認定協会 臨床心理士資格取得 登録番号 15059
- ・2012（平成24）年 日本幼少児健康教育学会第31回大会春季岡山大会会長
- ・2012（平成24）年 ノートルダム清心女子大学大学院人間生活学研究科人間複合科学専攻 修了 博士（学術）
博士論文「高校生の身体的・精神的健康の保持増進に関連する生活習慣、疲労自覚症、抑うつ、体力の諸要因に関する研究」

2. 法の改定等

- ・2004（平成16）年 栄養教諭の創設 発達障害者支援法公布
- ・2006（平成18）年 学校教育法の改正 盲、聾、養学校から特別支援学校へ一本化
発達障害を含む障害のある児童生徒等への教育支援等
- ・2007（平成19）年 教育職員免許法の一部改正 教員免許更新制導入
- ・2008（平成20）年 中央教育審議会答申 この答申は、学校保健関係者の役割の明確化及び校内外の組織体制づくりに焦点を当て審議が行われた。養護教諭については、8項目にわたり述べられており、学校保健活動の推進に当たって中核的な役割が求められた。養護教諭の職務については、5項目に整理され、述べられた。学習指導要領の改訂・学校保健法の一部改正（学校保健安全法に改称）

①養護教諭を中心として関係教職員等と連携した組織的な保健指導、健康観察、健康相談の充実

- ②地域の医療機関等との連携による児童生徒等の保健管理の充実
- ③学校の環境衛生水準を確保するための全国的な基準の法制化
- ④安全を脅かす事件、事故及び自然災害に対応した学校安全計画の策定による学校安全の充実
- ⑤各学校における危険発生時の対処要領の策定による的確な対応の確保
- ⑥警察関係機関、地域のボランティア等との連携による学校安全体制の強化

9. 2012(平成24)年4月 60歳～2014(平成26)年3月 62歳 中国学園大学勤務時代

1. 学生部学生課参事としての活動、カウンセラーとしての活動
岡山県教育公務員定年退職後、中国学園大学学生課参事の職を得て勤務した。通勤時間が今までで一番短く、自宅から車で7分の通勤距離であった。学生への養護活動（保健室）と臨床心理士の資格を生かした学生への相談活動（学生相談室）が仕事であった。パソコンを活用した相談活動も実施した。夏休みには1週間に渡って東日本大震災後の東北宮城県気仙沼市へのボランティアに参加した。学長、教職員、学生が大型バスで気仙沼に入り、自炊生活をしながら仮設住宅を訪問し、子ども達と遊んだり、大型絵本の読み聞かせ、お祭りイベント、料理教室、心の相談活動などに参加した。

<研究論文等>

- ・2013（平成25）年 健康診断結果からの生活習慣病予防の一考察（論文）
- ・「子どものこころと体 西日本大会」開催 総司会
- 2. 法の改定等
学校保健安全法施行規則の一部を改正する省令
- ①結核の有無の検査方法の技術的基準について
- ②感染症の予防方法について
- ・2013（平成25）年 いじめ防止対策推進法制定 いじめの定義
- ・2014（平成26）年 学校保健安全法施行規則の一部改正 <児童生徒の健康診断>

10. 2014(平成26)年4月 62歳～2020(令和2)年3月 68歳 びわこ学院大学教育福祉学部子ども学科勤務時代（滋賀県へ単身赴任）

1. 1年目、2年目は養護教諭養成科目担当教授として、3年目からは子ども学科学科長、教育福祉学部学部長を兼任した。
教育福祉学部では、家庭や地域社会に働きかけることができる福祉の視点と、子どもの本質や人間としての本質をきちんと理解できる教育者の視点をあわせ持ち、幅広い現場で活躍できる人材の育成をめざしていた。子ども学科では、乳幼児の保育・教育、初等教育、養護教育について学ぶほか、社会福祉の分野についても専門的に学び、子ども一人ひとりの個性や可能性を引き出すための知識と技術を学ぶ学生を育成した。大学祭でのユニークな取り組みとして「わくわくフェスタ」の開催があった。大学祭（紅葉賀祭）で1・2年生が協力して子どもに向けた体験型のイベントを企画・運営する取り組みだった。子どもに関

わる専門職としての自覚を持ち、子どもにとって遊びとは何か、どうすれば子どもが楽しいと感じ、満足してくれるかを考えること。ただ遊ばせるのではなく、発達段階にふさわしい遊びを提供する。この体験を通して、「教育・保育の学びを实践する力」「子どもが楽しめる企画を立案・運営する力」「グループで連携・協力する力」という3つの力の獲得を目指した。

「びわ学キャリア塾」を創設した。「びわ学キャリア塾」とは、学生一人ひとりの進路希望に合わせたキャリア支援を組織的かつ計画的に行う独自のサポート体制である。大学や短大、学科といった垣根を無くし、「全学科」と「進路・就職支援センター」が連携する「オールびわ学体制」で取り組むことにより、それぞれの強みを最大限に活かせることが特長となる。夢の実現に向けた成長には、入学前から進路決定まで、一貫したサポートが必要と考える。まず、入学前学習で大学の授業を理解する力を作り、入学後は、将来について考え、どの分野に進むにしても必要となる「基礎学力」をつけていく。実習が始まる頃には、個々の目指す進路に合わせ教師塾（小学校教諭、養護教諭を目指す学生が参加）・福祉塾（保育士、社会福祉士を目指す学生が参加）・仕事塾（公務員、企業を目指す学生が参加）の3つの塾で、それぞれに特化した専門的なサポートへと続く。

卒業研究発表会について、教育福祉学部（子ども学科・スポーツ教育学科）では、4年次に卒業に関する課題（論文・制作・演奏・学びレポート等）への取り組みが必須となっており、大学での学びの集大成と位置づけていた。4年次始めにテーマを決定し、ゼミ担当教員の指導のもと、長い時間をかけて研究活動等に取り組んだ。自身の興味・問題意識に基づき定めたテーマを深く降り下げ、学びの復習、文献講読、先行研究調査、アンケート、データ分析といった学びを通じて自分なりの考えをまとめ、主張を行う卒業課題への取り組みには、卒業後の社会生活で役立つ要素が多く含まれている。2月上旬には、学科別に卒業研究発表会が実施され、4年生全員が発表の機会を持った。4年間の学修で最も時間を書けて取り組んだ成果の発表に臨む学生達、発表に真剣に耳を傾け質問する学生、卒業研究発表会は熱気に溢れた学修の場となっていた。苦しみながらも時間を書けて取り組んだ学生ほど成果が表れ、卒業前の最終課題をやり遂げた学生からは、満足感・充実感が伝わってきた。卒業課題への取り組みを通して身につけたタフさを、社会人として発揮してくれることを願った。

2. 養護教諭養成教授としての活動

養護教諭は「保健室の先生」として、学校内の全ての子どもに関わる仕事である。怪我・疾病などの応急処置だけでなく、専門的な立場から子どもの心と体の健康保持・増進を支援する。大切なのは、子どものことを第一に考え、寄り添い、支えとなること。そのため医学的、教育学的、心理学的な知識はもちろん、情報処理能力・発信力、観察力、コミュニケーション力、包容力、判断力、連携・調整力なども必要である。その力を講義、実習、教育ボランティア、クラスやゼミの活動、先輩や卒業生との交流などを通して4年間で段階的に着実に学んでいくシステムをとっていた。授業では「子ども学Ⅰ」「子ども学Ⅱ」「養護概説」「健康相談活動」「養護実習事前・事後指導」「教職実践演習（養

護）」、「専門研究」「卒業研究」を担当した。

その他、社会貢献活動として地域の女性を対象にした公開講座の講師、地域の学校の保健室サポートプロジェクト、高大連携事業の講師、養護教諭レベルアッププロジェクト、滋賀県主催ライフプランニングプログラムモデル構築事業に携わった。

<研究論文等>

- ・2014（平成26）年 高校生の肥満度、抑うつ傾向、体力の関連（論文）
- ・2014（平成26）年 高校生の自覚症の発現、生活の満足度、抑うつ傾向、排便状況相互の関連性（論文）
- ・2015（平成27）年 高校生の生活の質の向上に関する学校保健学的考察（論文）
- ・2016（平成28）年 養護教諭の職務に関する一考察（論文）
- ・2016（平成28）年 養護実習ガイドブックの改訂（書籍）
- ・2017（平成29）年 小学生における入眠潜時ならびに起床の仕方に関わる生活習慣
- ・2017（平成29）年 中学生における入眠潜時ならびに起床の仕方に関わる生活習慣
- ・2018（平成30）年 養護教諭養成教育における看護技術項目の検討—現職養護教諭対象の調査から—
- ・2018（平成30）年 養護教諭レベルアッププロジェクト—養成・採用・研修の接続の強化と一本化
- ・2018（平成30）年 中学生の生活習慣と自覚症の訴え数ならびに生活の満足度との関り（論文）
- ・2018（平成30）年 地域連携による保健室サポートプロジェクトの実施について（論文）
- ・2019（平成31）年 小学生から中学生への移行期における入眠潜時ならびに起床に関する研究
- ・2019（令和元）年 子どもと社会の未来を拓く—子どもの健康と安全— 分担執筆（共著）
- ・2020（令和2）年 Self-evaluation of Physique in female students（論文）
- ・2020（令和2）年 大学生における睡眠状況と健康管理
- ・2020（令和2）年 子どもと社会の未来を拓く—子どもの健康— 分担執筆（共著）

<役職等>

- ・2016（平成28）年～2020（令和2）年 教育福祉学部学部長、子ども学学科科長
- ・2016（平成28）年 全国養護教諭研究大会運営委員 滋賀県少子化対策学生プロジェクト委員 滋賀県養護教諭育成事業研修プログラム検討会参加
- ・2016（平成28）年～2018（平成30）年 子どものからだと心 西日本研究会議実行委員
- ・2018（平成30）年 びわこ学院大学教育研究活動優秀賞受賞

2. 法の改定等

- ・2014（平成26）年 学校保健安全法施行規則の一部改正 児童生徒の健康診断 ①検査項目並びに方法及び技術的基準 ②保健調査 職員の健康診断 ③方法及び技術的基準
- ・2015（平成27）年 性同一性障害に係る児童生徒についての特有の支援

- ・2017（平成29）年 現代的健康課題を抱える子どもたちへの支援～養護教諭の役割を中心として～
- ・2019（令和元）年 児童虐待防止対策の強化を図るための児童福祉法等の一部を改正する法律

11. 2020（令和2）年4月 68歳～

姫路大学教育学部こども未来学科勤務時代

1. 養護教諭養成特別特任教授としての活動（2021（令和3）年より特別招聘教授）

2020年1月16日、日本で新型コロナウイルス感染症初確認。その後の世界的大流行により、時の安倍晋三首相は2020年3月2日から春休みの期間で全国の小・中学校と高校、特別支援学校に臨時休校を要請した。幼稚園、保育所、学童保育は対象から外した。休校期間は3月から最長で約3か月に及んだが6月にはほぼすべての学校が再開された。筆者は、ご縁があって2020年4月より特別特任教授として姫路大学へ勤務することとなった。新しい職場においては、新型コロナウイルス感染症予防の観点からオンライン授業の対応がとられた。学生とのやり取りはMellyで行い、Google Meetを使用しての講義ということになった。慣れない中、大学内の講習会や知り合いの方に教えて頂いたりしながら技術を習得し、オンライン授業に臨んだ。少しずつ慣れてきてからはハイブリッド、動画配信、動画視聴、オンデマンド等いろいろな方法を使い、できる限り対面に近い授業を目指したが通常とは違うペースで授業が進んだことで、学修内容の定着度が憂慮され、改めて対面授業の利点を知ることとなった。

将来、養護教諭採用試験を受験希望する学生に対して、3年次の11月からは本格的に養護教諭採用試験対策に力を入れている。養護教諭の採用試験は高倍率であることから、学生には、まず1次試験対策として各県の過去問に挑戦してもらい、間違えた箇所は徹底的に復習し、記憶として定着させるように指導している。2次試験対策では、お盆休み返上で小論文、実技試験、場面指導等、3人の専門教員で対策にあたっている。姫路大学までの通勤時間は、往復6時間の長時間通勤である。電車内での時間の過ごし方は、読書、スマホ（ニュース・音楽・映画・落語・ライン等）、うたた寝、時に仕事等で時間を過ごしている。

<研究論文等>

- ・2020（令和2）年 養護教諭の救急処置一特に頭部外傷の判断と対応に関する文献研究一（論文）
 - ・2020（令和2）年 医制における学校衛生と現今の学校保健について（論文）
 - ・2021（令和3）年 養護教諭養成教育における研究活動に係る指導―養護教諭の実践的研究論文を活用して―（論文）
 - ・2021（令和3）年 多様化する特別な支援を要する児童生徒への養護教諭の対応（論文）
 - ・2022（令和4）年 コロナ禍における養護実践の論文化を目指す学会企画と運営に対する提言（論文）
 - ・2023（令和5）年 養護教諭50年の回想（実践記録）
- #### 2. 法の改定等
- ・2020（令和2）年 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル、JRC蘇生ガイドライン2020

発行 学校保健安全法施行規則の一部改正 文部科学省

- ・2021（令和3）年 学校教育法施行規則の一部改正 文部科学省

12. おわりに

後輩への贈り物として、勤務の折々に思ったことを書き留めてみた。また、これまでの養護実践を踏まえて、保健室50音を記しておいた。

○児童生徒が保健室へ来室した時よりも、退室する時に少しでも心身の調子が良くなるように対応するよう心がける。暗い表情の児童生徒が少しでも明るい表情になって退室できるように。

○小規模校勤務時は、教員数が少ないため、いろいろな校務分掌を担当することになるが、学校の仕事に雑用というものは無い。全ていつか自分の糧となり、役にたつ。

○未来は自分の中にある。日々の自分の考え、行動がそのまま未来へとつながる。なりたい自分になるのは自分次第である。

○いざという時、自己決定できる児童生徒を育てることは保健室からの進路指導となる。

○「継続は力なり」コツコツ、コツコツ、少しずつでもよいので休まず前へ進もう。

○悩みに押しつぶされないように。悩んで、悩んで悩み抜いた後は、悩む気持ちを両肩から荷下ろしすることが出来る自分が自分の心の健康のために必要なことである。

○養護教諭は専門職。COVID-19など思いもかけなかったようなことが学校現場でおきる。時代と共に、その時の最善と思われることに取り組むことが求められる。

○仲間と共に実践研究に取り組み、切磋琢磨して自分に磨きをかける。

○根拠をもとに周囲に説明できる力をつけることは専門職として欠かせない資質である。

○子ども、同僚、保護者、地域の方に信頼されるためには、日々の一つ一つの取り組みを誠実に果たすことである。

○積極的にネットワーク作りをしよう。他職種の方々とつながりて解決することが沢山ある。

○緊張する場面では、まず大きく深呼吸して自分自身を落ち着かせる。

○自分の実践をまとめ、文章化することで人と理解しあえ、後にも残るという利点がある。

<是我が保健室>

○子どもはまず誉めて、次に、より良くなるために気付いたことをアドバイスしよう。大人でも褒められたら嬉しい。子どもであればなおさらのこと。しっかり誉めてあげよう。

○伝える時は、解り易く内容を厳選して伝えると子どもの心に届く。

○好奇心旺盛に何でもやってみる。それが自分の人脈を広げ、ひいては人間の幅を広げてくれる。

○よき理解者や協力者は、職場の人間関係づくりの中で生まれるものである。養護教諭という職は一人であっても仲間は一抔存在している。

○連携は人と人との関りが大きく影響することからコミュニケーション能力が要求される。コミュニケーション能力はいろいろな関わりの中で経験したことをベースに、徐々に培われていくが、日常の中での「声掛け」からスタートする。まずは朝の挨拶から。

○周囲の状況を的確に判断して、効率よく処理し、次につなげることを考えつつ、繰り返し実践することで少しずつ道が拓かれる。

○学校は生き方を学ぶところであり、生きる力を身につけるところである。

○ミクロとマクロ両方からの見方・考え方ができる養護教諭でありたい。

○養護教諭の実践において大切なことは、子どもの視線で考え、企画し、実践し、子どもの変容を評価することである。

○保健室50音

あ 挨拶はいつも嬉しい笑顔で行います

か 環境に気遣い工夫と研鑽し効果を上げます

さ 最初に親しくすることは生徒の素質を伸ばします

た 大切な知識を使い丁寧に取りまとめます

な 何事も忍耐強く抜かりなく熱意を持って臨みます

は はっきりと必要品は不足なく平時から保管しておきます

ま 真面目に皆で夢中になり面倒な問題解消します

や 優しく労り勇気を出して遠慮せずに養生します

ら 来室は臨機応変、留守どきの連絡は廊下に記します

わ 解りやすく言っとうまくいくよと笑顔を送ります

ん 蘊蓄を傾けます

50 years' reflection of a Yogo teacher

Keiko Hiramatsu

Abstract

Fifty years have passed since the author engaged in work as a Yogo teacher.

This paper is a reflection of the author's history, and provides information about the past and present of nursing activities that can be used as a reference.

In my first year as a Yogo teacher, I was puzzled by the gap between the ideal and reality.

However, as the years went by, I discovered the joy and reward of being a Yogo teacher, and began to think seriously about becoming one.

When I think about why my perspective changed, I think it was from the existence of children. While working with children, I thought about what I could do.

I am fortunate that I was able to contribute to the promotion of mental and physical health of children at each school by using my experience.

keywords : Yogo teacher, duty, practice, record, reflection